

2021年9月

日本心理学会第85回大会公募シンポジウム

宗教心理学的研究の展開(18)

ー宗教, スピリチュアリティを追究するための「新たな連携・協働」の試みー



## 宗教学と心理学の連携に際しての 問題とその解決策

藤井修平

# 発表の目的

本発表は、宗教学と心理学の連携に際して解決しなければならない問題を特定した上で、その解決策を提示することにより、両者の共同研究のための基盤構築を行うことを目的とする

1.

# 連携に際しての問題

## 連携に際しての問題

本発表において述べるように、心理学と宗教学の連携には大きなメリットがあるにもかかわらず、とりわけ日本ではそのような研究は進んでいない。

その理由は、両者の連携に際してのいくつかの問題が存在し、それらが妨げとなっているためと考えられる。

まず、その問題を特定する

# 連携をめぐる問題

心理学の側から、宗教を扱うのに抵抗がある理由としては、以下の3つが挙げられる

1. 「怪しい」研究の存在
2. 国内での宗教のプレゼンスの低さ
3. 方法論上の懸念

# 1.「怪しい」心理学的研究

宗教を扱う心理学的研究を「怪しい」と思うのは必ずしも偏見からだけではないといえる。

東京帝国大学の福来友吉は、透視や念写の存在を信じて御船千鶴子などの超能力の実証を行おうとし、最終的には東京帝大を追放されることとなった



Wikimedia Commons

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mr.\\_Tomokichi\\_Fukurai,\\_lecturer\\_of\\_the\\_Shinshu\\_University.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mr._Tomokichi_Fukurai,_lecturer_of_the_Shinshu_University.jpg)

現在でも日米で超心理学が同様の実験を繰り返しているが、科学の基準を逸脱しているとほとんどの人がみなしている

明確に宗教と関わるものとしては、離れた場所にいるそのことを知らされていない参加者に祈ること (intercessory prayer) によって、健康への影響があるかという研究はたびたび行われており物議をかもしている (Masters et al., 2006)

## 2.国内での宗教のプレゼンスの低さ

成人の日本人のうち「信仰とか信心とかを持っている」と答える人は2019年で23.9%であり、決して多いとはいえない。

また世俗化に伴う宗教の私事化の結果、政治的姿勢などに宗教が影響を及ぼしてもよいと考えている人も少ない(宗教団体が特定政党を支持することは好ましくない19%、宗教団体が選挙に関わることは好ましくない29.8%、支持してもしなくてもよい24.1%)(庭野平和財団, 2019)



### 3.方法論上の懸念

宗教学の側からは、還元的な手法、とりわけ量的研究に対してはしばしば批判が行われている。他方で理想とされているのは、対象の定量化を行わず、「厚い記述」によって理解を試みる質的研究である

私が用い、その有用性を示そうと試みる文化の概念は、本質的に記号論的なものである。人間は自らが紡ぐ意味の網にからめとられた動物であるというマックス・ウェーバーの言を信じ、私は文化はそうした網であるとみなしており、それゆえ文化の分析は、法則を求める実験的科学ではなく、意味を探究する解釈的な方法で行われるべきである。(Geertz, 1973, p. 5)

### 3.方法論上の懸念

これを反転した形の見方が心理学においても存在していると考えられる。すなわち宗教は実験的・定量的な手法によって研究できるものではないので、心理学の対象とはならないという見方である

これらの問題を解決するためには、何よりも心理学と宗教学の連携が可能であり、有意義な成果が見込めるということを示す必要がある

そのために、次の疑問に答える形で議論を進めていく

- ▷ なぜ「宗教」なのか？
- ▷ なぜ「宗教学との連携」なのか？

2.

なぜ「宗教」なのか？

## 研究の基本姿勢

最初に確認しておくべきこととして、「宗教心理学」という研究の目的は、特定宗教の正しさを示すことや、神や幽霊などの超自然的存在が実在するかを検証することではなく、あくまで人間の心理と行動の解明にある

その上で、なぜ「宗教」に着目すべきかを以下に述べる

その理由は、宗教が今でもなお世界の人々の心理と行動に大きな影響を及ぼしているからである  
例として2020年の米大統領選挙では、宗教への所属によって投票先に大きな差が生まれている

	トランプ（共和党）	バイデン（民主党）
主流派プロテスタント	61%	38%
白人福音派	76%	24%
カトリック	50%	49%
ユダヤ教	31%	68%
イスラム教	35%	64%
その他の宗教	36%	62%
無宗教	26%	72%

藤井（2021）より作成

# 米国では宗教心理学が積極的に研究されており、その拠点が米国心理学会(APA)の第36部門「宗教とスピリチュアリティの心理学」である

## 第36部門について

宗教とスピリチュアリティの心理学は、米国心理学会の一部門であり、人々の生活や、心理学の分野における宗教とスピリチュアリティの意義を理解するために、心理学的理論、研究および臨床実践を推進しています。この部門は科学と臨床・応用実践の間の意見交換を手助けし、その活動を通して宗教とスピリチュアリティの心理学的次元への公共の意識を高めようと試みています。この部門は特定の教派と関わるものではなく、特定の宗教的立場や信念を支持するものではありません。当部門は宗教とスピリチュアリティの心理学に関心のある世界中の心理学者や、他の研究者を歓迎します。

概説書であるPaloutzian and Park (2013)およびHood, Hill, and Spilka (2018)を参照すると、宗教心理学において取り扱われている主題は、以下のように多岐にわたっている

下位分野からの研究	トピック	宗教と～の関係
発達心理学	回心	宗教と道徳・利他
進化心理学	カルト	宗教と偏見・暴力
神経科学 (脳科学)	脱会	宗教と健康
精神分析	神秘体験	宗教と意味・目標
人格心理学	テロリズム	宗教とコーピング



これらの研究では、宗教に関する変数とその他の要素の関係が探究されているが、そうした宗教の尺度は多数作成されている

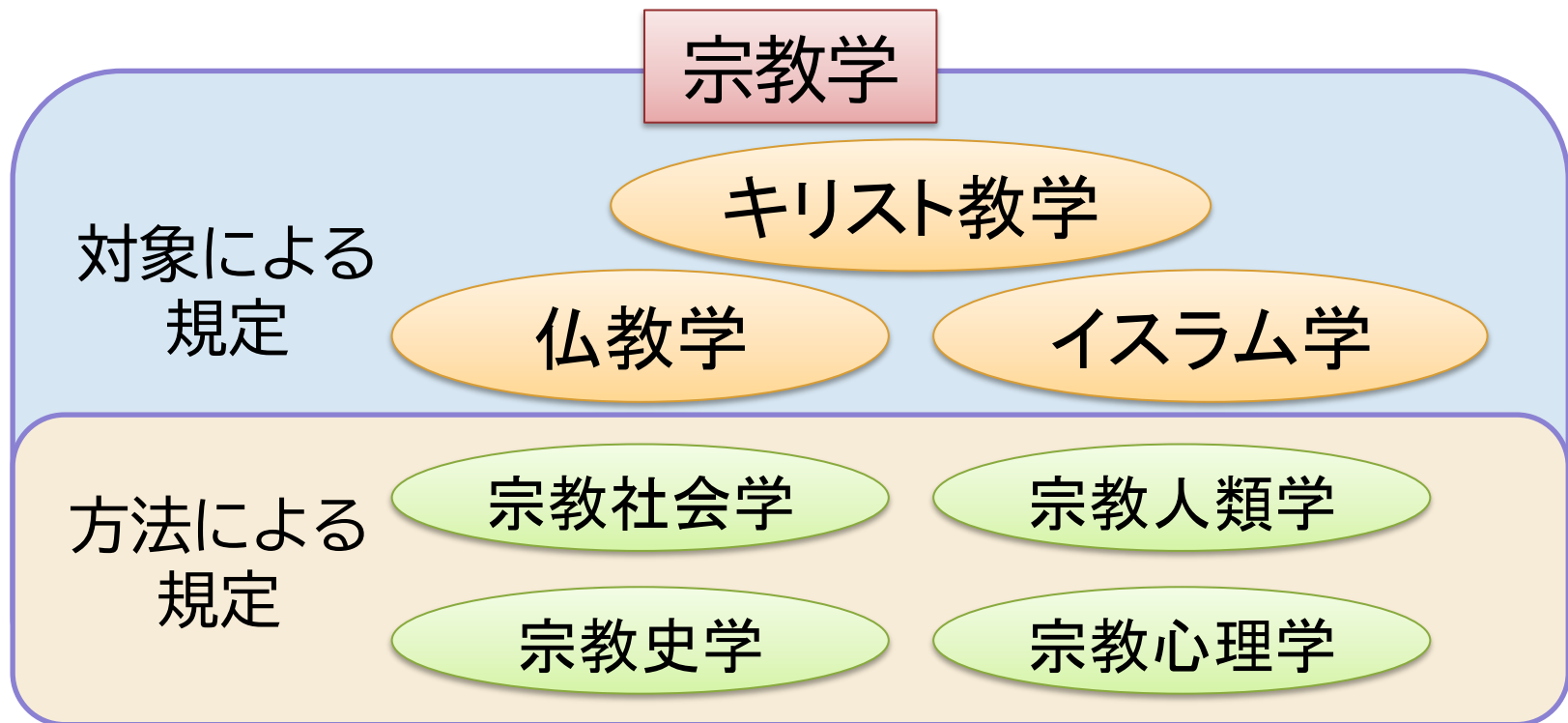
宗教的性向の尺度	宗教的機能の尺度
全般的宗教性	宗教的経験
宗教的ウェルビーイング	動機としての宗教
宗教的信念	宗教的コーピング
宗教的発達	宗教的意味と価値観
宗教的愛着	
宗教的社会参加	
私的宗教実践	
宗教的経歴	

# 3.

なぜ「宗教学との連携」なのか？

# 宗教学について

宗教学とは一般的には、宗教を研究するあらゆる学問の総称であり、それゆえ宗教学との連携とは、他分野との学際的研究ということになる



それでは、なぜそのような学際的研究が必要なのか。それは宗教の概念が世界中で使われており、長い歴史を持っているゆえに、非常に把握しづらいものだからである。

宗教の定義は50以上存在し、いずれも規定した人のバイアスが大きく働いていることが指摘されている (Smith, 1998)

# 宗教の定義問題

たとえば宗教を

超自然的存在を信じること

として定義したとする。この定義ではキリスト教徒は含めることができるが、日本で初詣や墓参りをする人が宗教的かはこの定義ではわからず、なおかつUFOや未確認動物を信じる人まで含まれてしまう。定義に問題があると、それを元に作られる尺度にも影響してしまうだろう。

定義を集団基準にして、「信念をもつ人々の集団」としても問題は解決せず、今度は政治団体や自己啓発セミナーなども含まれることになる

こうした宗教の定義問題について宗教学は議論を重ねており、特定宗教のバイアスが入ったり西洋中心的にならない見方を模索している(McCutcheon, 2001)

そのため、宗教学の視点を踏まえることで、対象とする宗教をより適切に把握できるといえる

## 宗教と関係する要素

もう一つの宗教学との連携のメリットは、普段宗教と  
思われていないものに宗教的要素が見出せる点であ  
る

宗教の定義の幅広さについてはすでに述べたが、こ  
のことは宗教には多様な側面があり、それぞれが心  
理や社会の別の要素と関わっていることを意味して  
いる

たとえば、自閉症傾向の得点が高い人々は、神への信仰とりわけキリスト教のような人格神の信仰の水準が低いことが知られている(Norenzayan et al., 2012)

これは、自閉症の人が苦手とする心の理論を用いたメンタライジングが、他者の心と同時に神の心の推論にも用いられているためだと考えられている





このように、非宗教的な思考や行動に用いられている能力や傾向性が、同時に宗教的な思考や行動にも用いられていることが明らかになっている。その例を挙げると、

- ▷ 心の理論(Bloom, 2004)
- ▷ アニミズム(タイラー, 2019)
- ▷ 目的論(Kelemen, 1999)
- ▷ 擬人観(Waytz et al., 2010)
- ▷ 行為者検知(Barrett, 2000)

等がある

これらの心的傾向から宗教が生み出されるとみなされているので、その研究は宗教的現象と非宗教的現象の双方の理解に資するということである

加えて、純粋な宗教とはみなせないものの、宗教と特徴を共有する現象には以下がある

疑似科学

陰謀論

妖怪・お化け

自己啓発セミナーや  
マルチ商法

これらにはすでに心理学的研究も存在しているが、宗教学的視点によりこれらの現象と宗教との共通点を見出すことができ、宗教の知見を応用することができる

# 連携に際しての問題の解決策

以上のことは、最初に述べた問題の解決策とすることが出来る。それぞれの問題に対して、

1. 関わるべきでない研究を認識し、自らの研究姿勢を明確にする
2. 幅広い宗教の概念を採用することで、宗教に関連する要素は今でも大きく関わっていることを示す
3. 宗教は特別な研究方法を必要とする特別なものではなく、日常的な活動の延長だと理解する

## 参考文献

- Barrett, J. L. (2000). Exploring the natural foundations of religion. *Trends in Cognitive Sciences*, 4(1), 29–34.
- Bloom, P. (2004). *Descartes' Baby*. New York: Basic Books.
- 藤井 修平 (2021). 波乱の2020年米大統領選挙における宗教の関わり ラーク便り 89. 52-56 .
- Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures: Selected essays*. New York: Basic Books.
- Hood Jr., R. W., P. C. Hill, and B. Spilka, (2018). *The Psychology of Religion*, 5th ed, New York and London: The Guilford Press.
- Kelemen, D. (1999). Beliefs about Purpose: On the Origins of Teleological Thought. M.C. Corballis and S.E.G. Lea eds., *The Descent of Mind: Psychological Perspectives on Hominid Evolution*, Oxford: Oxford University Press, 278-294.
- Masters, K.S., Spielmans, G.I., Goodson, J.T. (2006). Are there demonstrable effects of distant intercessory prayer? A meta-analytic review. *Annals of Behavioral Medicine*, 32(1), 21-26.

- McCutcheon, R.T., (2001). *Critics not Caretakers: Redescribing the Public Study of Religion*, Albany: State University of New York Press.
- 庭野平和財団 (2019). 世論調査: 日本人の宗教団体への関与・認知・評価の20年 – 1999年・2004年・2009年・2019年の世論調査から – Retrieved from [https://www.npf.or.jp/pdf/2019\\_research.pdf](https://www.npf.or.jp/pdf/2019_research.pdf) (2021年6月28日)
- Norenzayan, A., Gervais, W.M., and Trzesniewski, K. (2012). Mentalizing deficits constrain belief in a personal God. *PLoS ONE*, 7(5), e36880.
- Paloutzian, R.F. and C.L. Park, eds., (2013). *Handbook of the Psychology of Religion and Spirituality*, 2nd ed., New York: The Guilford Press, 3-22.
- Smith, J. Z., (1998). Religion, Religions, Religious. Mark C. Taylor eds., *Critical Terms for Religious Studies*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 269-284.
- タイラー, E. B. 奥山 倫明・奥山 史亮・長谷 千代子・堀 雅彦(訳)(2019). 原始文化 国書刊行会
- Waytz, A., Cacioppo, J.T., and Epley, N. (2010). Who sees human? The stability and importance of individual differences in anthropomorphism. *Perspectives on Psychological Science*, 5(3), 219-232.